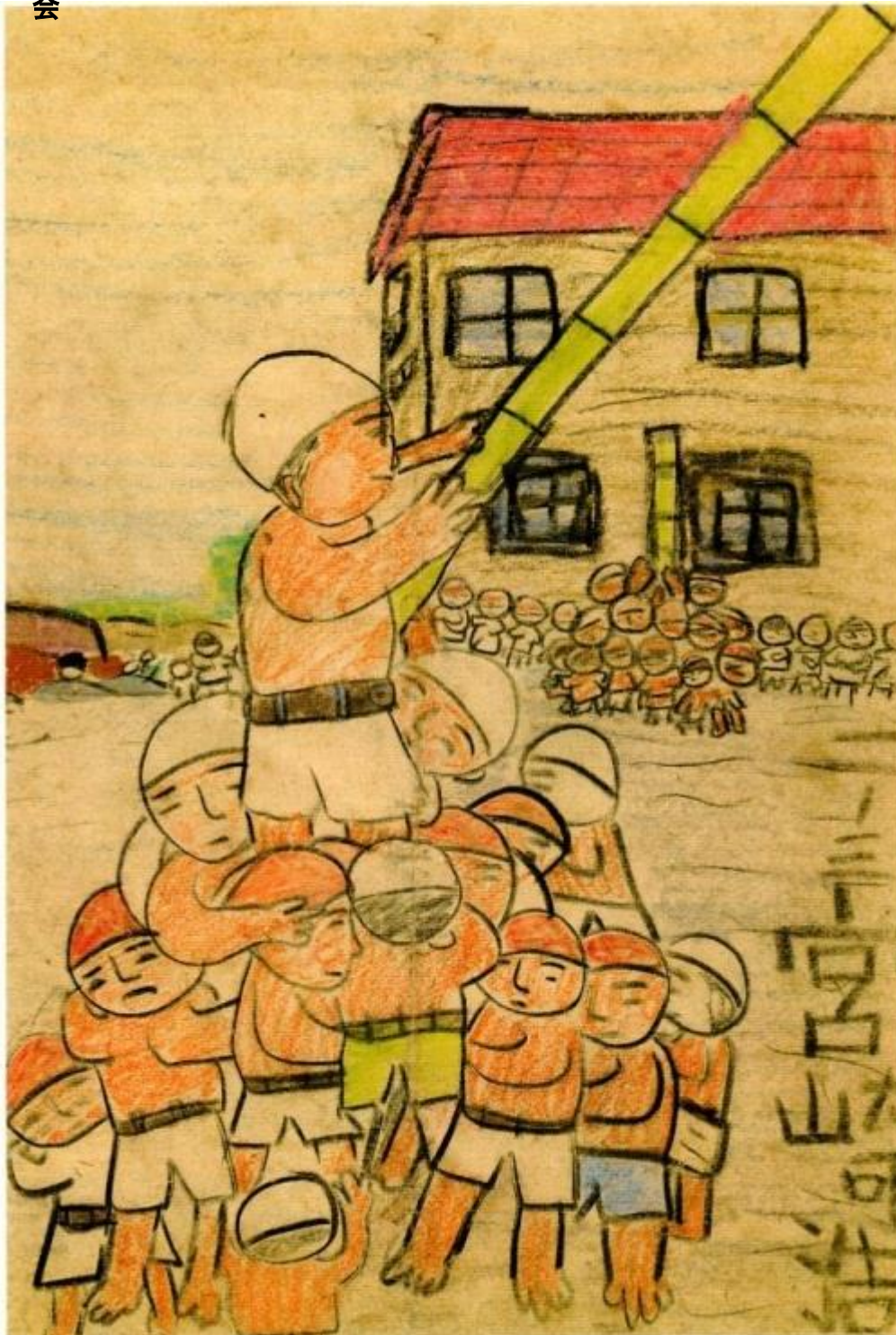


西田小学校・同窓会 会報

学校創立 70 周年 記念号

発行者 西田小学校同窓会
k k

編集責任者・田村晋一郎(二期生)

創立から2年後の運動会
会

この絵は、学校創立の^学2年後に描かれたものである。10年以上前に絵の作者・宮崎浩さん(6期卒業生)から、直に頂戴した。西田小学校は昭和17年6月

に開校した。屋根瓦の色が赤い新しい校舎は、丘の上に映えて、親も子もこの学校で学ぶ希望に胸を膨らませたものである。宮崎さんも屋根の色にアクセントを付けて描いたのだと思う

然し、この学舎は僅か3年後の5月25日夜、太平洋戦争時のB29による空襲で全焼した。

校舎の写真は殆ど残っていない上に、わずかに残った写真には色のついたものはない。宮崎さんからこの絵を頂戴した時、2年生にしてはうますぎる絵 そのものもさることながら、この屋根の色を、いつか皆さんにご披露しようと思い、大事に保管してきた。

宮崎さんは昭和18年に入学し、2年3組と絵に描かれているから、この絵は翌昭和19年春の運動会を書いたものである。何故に春かと言うと、この年の8月18日には、棒倒しに参加した多くの上級生は、長野県の集団疎開地に旅立ち、秋にはこんな運動会は開けなかったからである。

学校創立 70 周年、誠におめでたい事である。同時に、わが西田小学校・同窓会も創立 20 周年を迎えた。

同窓会は学校創立 50 周年を記念して、二期生の野口洋介氏が中心となって創立された。野口氏は残念ながら間もなく亡くなられた。氏は 1932 年生まれであつたら、存命であれば今年は 80 歳になる。同窓会設立時は 60 歳であつた。私は、自らの会長経験で、60 歳が小学校の同窓会年齢の始まりだと思っている。若い世代の卒業生は仕事や家庭でも忙しく、同窓会への選択肢は低い。卒業生も 60 歳になって、ようやく全校同窓会にも気分が廻って来るということである。当会もこの経験則に合致している。一方、一期生、二期生で元気な方も多い。学校 70 周年とはまだまだ新しい学校なのである。お隣の杉二は既に 120 周年、桃二は 80 周年を経過している。

最近では定年年齢が上ったこともあり、同窓会年齢は 65 歳に上がっている。と云うこと

は同窓会は 65 から 75 才くらいの年代中心で維持しなければならない事になる。仕事から離れてほっとした時、からだの中のどこか、基礎部分に小学校時代に積み上げたものを感じる方がいて、同窓会に参加される。

数年前に個人情報保護法が導入されて、新卒業生の住所提供が難しくなり、世間の多くの同窓会が消滅した。当会はそれ以後、同窓会シニア世代に呼び掛けて、会費と寄付での運営を実験中である。色々問題もあるが、ここまでの 5 年間で 350 人ほどの方々が応じて下さり、資金的には安定の方向に向かっている。目標は 70 周年までに 500 人の会員を得て、次のステップに移ることである。

本年も、会員募集を呼び掛ける予定だが、目標通り先ず 500 人の会員の維持が出来た

上で、次の 10 年で更に地元会員が参加してくれることが同窓会維持の条件だと考えている。生存卒業生総人数を 1 万人とみて、1 千人の会員が 10 年先の 80 周年時におられれば、上々の出来と思うのだが、簡単ではない。もうしばらく役員の皆さんと具体案を相談しつつ、この実験の結着をつけたい。

今回の会報は創立 70 周年の記念特別号として、現会員が保有する写真や資料を基に、学校の歴史、地域の歴史につながる内容を中心に編集を行った。前述の如く、

会員の大多数が 1~20 期の卒業生なので資料としても学校創立 20 年までの内容が大部分となった。今後、次の世代がまた次に繋いで行ってもらえれば仕合せである。歴史の継承を意識してのことである。「母校の 70 年前、60 年前の特集」と題し

たほうが適当だったかもしれない。加えて、代々の名物先生として何人かの先生を

取り上げさせていただいた。一部の先生

については、身近な資料もあつ別にページを割かせて頂いた。

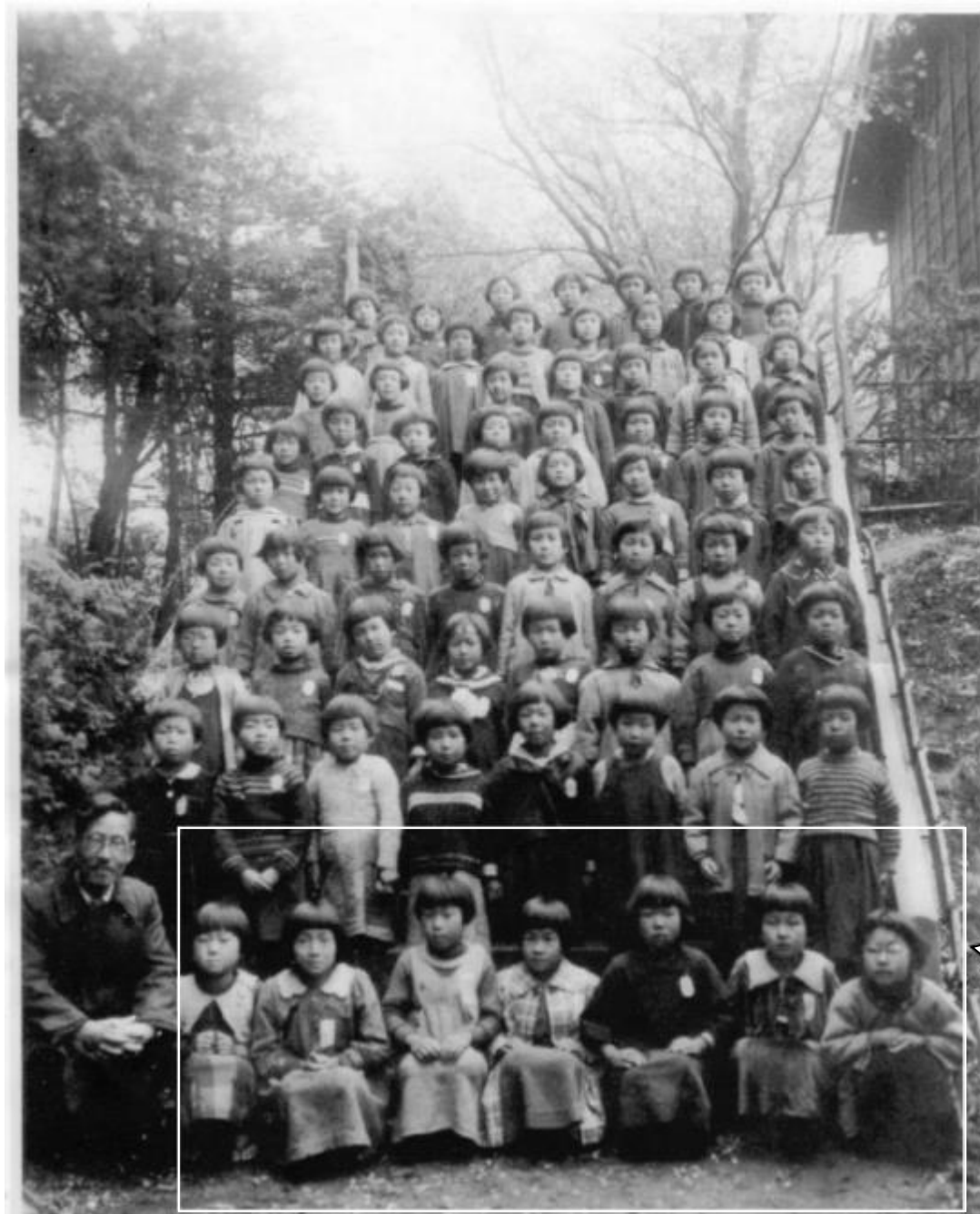
又、本誌では、10 周年記念時の PTA 会報からヒントや切り口を頂いた内容が多く扱われている。時の PTA 会長恩地孝四郎氏の作られた当時の会報の表紙を左に掲載させて頂いた。こんな会報が作られた当時のエネルギーに感服する。氏が先頭を切ってこの記念誌を作られたことは内容を見て明らかである。今回の経験をもって、同窓会の中に、学校まわりの歴史や伝統の継承役の一端を担う機能を加えることも考えてみ



慣れ親しんだ杉二からの転校 三年生女子 （杉二小の校庭での記念写真）

初代校長山極武利先生は PTA10 周年記念誌にこの日のことを次のように書かれている。
『入学する児童たちは桃二、杉二両校より花田校長、吉住校長に引率され、六年生に送られて登校した。希望に明るい表情の五年生以下 450 名であった』

杉二では各学級全員で西田小に送りだす数人の仲間の記念写真を残してくれた。
70 年前の話である。



三年生女子全員の写真である。西田小学校への転校生 7 名を見送ってくれた。杉二からの移籍児童は桃二に比べ圧倒的に少なかったことが判る。

昭和 19 年 8 月、西田小学校の 3, 4, 5 年生の大半が長野県小県郡別所村(別所温泉)に第一次集団疎開に参加した。下の写真は既に各所で紹介されているので別段珍しいものではない。

信州の冬は早いので、服装から 9 月頃の写真だろう。ここに来てまだ一ヶ月以内なので、家恋しさで相当参っている頃の写真だが、皆笑っている。家族に心配をかけないよう笑っていたのである。翌年の 11 月まで続く 1 年 3 ヶ月にわたるきびしい鍛錬の始まりであった。これ乗り越えたからこそ、その後の足腰の強さに繋がったのだろう。結果として「かわいい子には旅をさせる」事となった。

この場所は宿舎となった泉屋旅館の近くの北向観音という著名な寺で、長野市の善光寺と対をなすものと云われている。境内にある、かの有名な愛染かつらの巨木のある崖の下で撮影された。過去 2 回ここを訪れたが当時の様子がそのまま残っていた。

写って居られる 5 人の先生は間違いなく西田小の名物先生とされる先生に挙げられると思う。前列左の山極先生は、初代の大校長先生で、別所村の近くの塩田村のご出身であった。後列左から山岸義一先生、柴田菊重先生、濱真喜男先生、安里文夫先生の先生は集団疎開の最初から最後まで児童に付き添って下さった。濱先生が後に出版された集団疎開の記録を綴った小冊子「里に移りて」はこのページの次の石塚氏の話に繋がって行く。

産経新聞が取材した中にこの小冊子があり、これの作成で濱先生に協力し続けた石塚治臣氏に取材者が辿りつき、氏の父石塚長臣氏の手紙に結びついたものと聞いている。



山極武利 初代校長先生 その後の記録

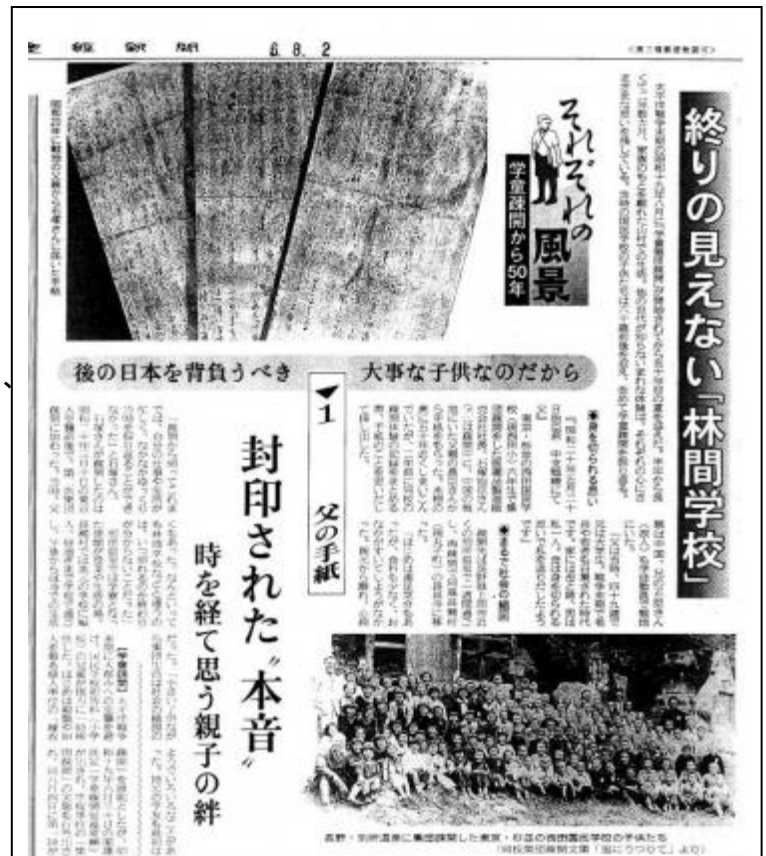
数年前に長野県の名門「山極家の家系図」写しを入手した。そこに、昭和 21 年 3 月、西田小から移動された後、文部省教育刷新委員、東京都永田小学校校長、日本初等教育協会等委員長、昭和 46 年 9 月 10 日没、従 5 位旭 5 等授賞と記録されていた。

疎開地に届いた父親からの手紙
3期生 石塚治臣氏の話

右のコピーは平成6年8月の産経新聞の記事である。集団疎開から50年経った平成6年に、シリーズもので特集が組まれ評判を呼んだ。

特集の初回版には、終戦の3ヶ月前に、疎開地の石塚氏に届いた父君石塚長臣氏からの手紙が紹介された。

先日クラス会があって、同氏からこの古い記事を会報で扱うことので了承をもらった。今の世からかけ離れた父親像と云われるかもしれないが、記憶に留めておきたい話として、ここでご紹介する事にした。手紙はわら半紙のような紙3枚に毛筆でつづられた長いものである。



石塚氏のはなし

『当時、父長臣は中国の戦地にいた。兄の正臣も学徒動員でやはり戦地にいた。家には母と姉、男は私一人。母は身を切られる思いで私を集団疎開に送り出したと思う』

『昭和20年5月20日 治臣君

中支戦線にて 父

……。敵の飛行機がこわいから逃げ出したのではないね。日本にはそんな弱い子は一人もない筈だ。子供たち全部が疎開するのは、君たちは今後数年の後の日本を背負って立つべき大事な子供であるからなのだ。あらゆる困難に耐えうる体の丈夫な、しかも強い心の人間になってもらわねばならぬのだ。「お母さんと一緒にないと淋しいな」と思うのを我慢するのも強い子供になる一つの訓練なのである。都会で育った子供は伶俐ですばしくて、勉強もできるが粘りが無いということをよく言われる。粘りと云うのは一つのことに對して頑張りぬいてやり通すという執念なのだ。戦地で兵隊さんをみても田舎で育ったの方が頑張りも効くし体も丈夫だ。

また、田舎に住めば、都会に住んでいては、理解のできない自然現象にも容易に触れることもできる。戦地にいるお父さんの経験でも木炭を自分で作ったし、野菜やさつまいも作った。実際に経験していれば何でもない事だ。

お国の為に、お父さんも兄さんも戦っている。東京ではお母さんと姉さんがおばあさまを守ってこれも頑張っている。君も頑張れ。先生やお友達にもよろしく伝えて下さい。』

(註) 石塚長臣様は戦後無事帰国されたが、兄正臣氏はこの手紙の日付の一ヶ月前の4月に沖縄で既に戦死されていた。沖縄にある戦没者の碑には正臣氏の名前も刻まれている。

PTA は戦後の昭和 22 年(1947 年)4 月 29 日、父母と教師の会(PTA)として発足した。学校創立から 5 年後である。それまでは、保護者の会として、後援会と母の会の二つがあった。PTA は此の二つの会も併合した形でスタートした。

初代 PTA 会長は二代目後援会長であった筆者の父、土屋忠信が 42 歳で就任し、復興校舎(第二次校舎)建設が一段落するまで会長を続け、昭和 23 年、2 代目会長井口三郎氏に引き継いだ。

多くの小学校が空襲で焼け、資材が不足する中、校舎再建の順番は、父兄の熱意次第とということで、後援会は猛烈に活動した。父が先頭で頑張っている姿をはっきりと記憶している。

校舎の復興が早かった分、材料も設計も劣悪で、学校創立 10 周年記念の祝典での来賓挨拶で「ボロ校舎を早く再建を」発言が出て物議をかもし場面があった。この辺のことが PTA の十周年記念誌に残されている。みずからの校舎がなく、桃二での寄校、二部授業に肩身の狭い思いをしてきた学校や後援会や母の会にしてみると、漸く持てた自分達の校舎をボロ呼ばわりされたことに「ボロ、ボロと云わないで」と反発したようだ。

そのボロ校舎も、落成式時(昭和 22 年 7 月)には先生方や PTA の役員が晴れやかな顔で下の写真に収まっている。

手元にある資料では

後援会 (学校創立後すぐ発足)

初代会長 内海梅次郎。

二代目会長 土屋忠信。

(一次校舎消失を経験)

PTA (終戦後発足)

初代会長 土屋忠信。

二代目会長 井口三郎。

三代目会長 矢代友三郎。

四代目会長 恩地孝四郎。

五代目会長 朝永振一郎。

となっている。

ここで、特に触れておきたい事は、この写真には PTA の方だけではなく、地域の方が入っておられることである。後援会時代を通じて、地元の有力者も、学校復興にに一方ならぬ貢献をして居られたことも記録しておきたい。

当時の後援会は男性中心であった。生徒の親の会と言うよりも先ず、学校を何とかしようとする、貧しい時代の地域パワーの担い手が後援会や母の会であったのだろう。

バラック校舎を建設する際、予算の都合ではずされた玄関(9.5 坪)、中校舎玄関(7 坪)、西便所(7 坪)、応接室兼校長室(5.5 坪)、謄写版室(2.2 坪)が後援会・母の会の寄付で作られていた事が、当時の教頭の川野千代松先生(最後列右端)の文章に記録されている。先生は第5代の校長になられた。

前列左から 4 人目のダークスーツが土屋忠信会長。その右側一人置いて手前元代校長にある山崎利雄先生。土屋忠信の左が当時の二代目校長の宮下恒寿先生(昭和 21~22 年)。



西田小 後援会と母の会の嘆願書(草案)

(昭和21年7月19日付)

濱真喜男先生が出版された自伝「共に育つ」の中に、この嘆願書の草案が記録されていた。これも西田小の歴史の一ページとして、ここにその一部を転記させていただいた。濱先生は集団疎開に最初から最後まで付き添われた4人の先生のお一人で、昭和23年まで西田小に勤務された。(本誌4ページ参照) この嘆願書は草案とあるので本当に出状されたものかどうかは判らない。然し、昭和21年7月には未だ校舎建設が着手されていなかったことだけは判る。ところが翌昭和22年7月には落成式を行っている。(本記念誌6ページ参照) あの校舎は一年以内で完成したことになる。

『東京都教育局長殿

杉並区長殿

東京都杉並区立西田小学校

後援会

母の会

……初代校長山極武利先生は本年3月末日まで新進気鋭の校長としてその蘊蓄を傾け精根を尽くして学校経営に当たられ、現杉七校長上飯坂好実先生亦教頭として敏腕を奮はれ、帝都教育界に明星の如き輝きを発して居ったのであります。新鮮な研究意欲に燃えた職員は固く手を握って堂々として教育の道にいそしんで来たのであります。特に国語教育における西田の存在は区内のみならず全都において指導的立場を取って居りました。これに対し後援会・母の会の私共は全く一体となって親和と尊敬のうちに力を合わせてまいりました。

卒業生の進学状況は百パーセントに近き好成绩、更に入学後は優秀な成績を収める者多

く、私共一同喜びと感謝に溢れて居りました。時恰も丁度太平洋戦争熾烈となり、学童疎開の声盛んに呼ばれる頃となりましたが、私共は何とかこの校舎に残って居れぬだろうか と願った次第であります。然し戦局は愈々急を告げ遂に信州へ集団疎開、或は縁故疎開と四方に分かれて行かざるを得なくなりました。学童集団疎開はどこの様子を聞いても初めてのことであり、問題があり消極的である様であります。西田校に於てはいささかもさようなことはなく、終始健全な生活教育が続けられて居ったのであります。

この間(19年8月より)西田本校校舎は兵舎に転用されることになりましたが、やがて空襲は激化し20年5月25・26日遂に私共の愛する校舎は焼失してしまいました。祖国と運命を共にしたとは言いながら、私共の家は殆ど無傷であるのに学校ばかりが失われたことを心から悲しみました。やがて、終戦となり桃井第二の校舎の一部を使用して残留児童の教育が続けられました。

11月10日、150名の集団疎開よりの引揚げに前後して縁故疎開よりの復帰者、更に市内より戦災のため転居して来る者、瞬間に疎開以前の人数になってしまいました。只今は入都制限がありますが、万一緩和の暁には千名突破を予想されます。之に対し現在の(桃二での:編集者註)使用教室は9室(内職員室1室)14学級で、5年生まで二部教授の余儀なき状態であります。かくては日本再建の基底たる教育の確立も単なる掛け声に過ぎなくなってしまいます。

幸に近き日に於いて建築を見ることが出来ますならば新日本の理想的学園建設に拍車をかけたい所存であります。

昭和21年7月1日



この写真は安里文夫先生のご遺品の中に残されていた。同窓会一期生の志甫哲夫氏が奥さまから頂いたもので、いつか同窓会の会報で使わせて頂く予定にしていた。

PTA 会長が 4 代目から 5 代目に引き継がれた際の記念写真であろう。学校創立 10 周年の行事の後であるから昭和 27 年から 28 年頃と思われる。

恩地氏は著名な彫刻家で画家である。勿論、朝永博士は後のノーベル物理学賞受賞者である。

恩地氏は正四角形と正三角形を組み合わせた西田小の校章をデザインされた。当時、男子は校章の付いた学帽で通学していたので、懐かしさを感じる卒業生も多い筈である。また同氏は現在も歌われている校歌も作詞された。10 周年記念誌の表紙をデザインされたことは前述のとおりである。

山極校長先生との出会いについて、10 周年記念誌に寄せられた同氏の文章があるので一部をご紹介します。

『……。私も前から荻窪に住んでおりましたから、散歩のときに、これは良い学校が出来たと思いました。丁度、空襲警報下に丘の

横の道に差しかった時、防空壕から初代校長山極先生に声を掛けられて、一緒に入れていただいたことを明るい風物と共に思い出します。(10 周年式典で)山極先生にもお目にかかった。あれから 10 年、西田校に孫が通学するようになって、この頃は屡々校門をくぐることになった。校舎も変った今、やはりあの当時の爽やかな健康な空気がはっきりと感じられる。……あの頃の樹はのびている。10 年、また 10 年、西田は爽やかな緑を茂らすでしょう。これを信じます。』

この文章から、恩地氏はお孫さんが西田に通学するようになった関係で PTA 会長にされた珍しいケースであることも判る。残念なことに恩地氏は 10 周年行事の 3 年後に 64 歳で亡くなられた。

濱井七男氏(11 期生。同窓会世話人)から恩地氏との思い出ばなしを投稿頂き(次のページ)、氏の別な一面が語られたことに感謝したい。

また朝永振一郎氏に触れることと、西田町一丁目の歴史ばなしに懸けて、氏の随筆を転載出来たことにも(その次のページ)感謝の気持ちでいっぱいである。

恩地孝四郎氏の思い出
第11期卒業生 濱井七男 川
(同窓会世話人 崎市在)

私は西田小学校時代、小児喘息で学校を休みがちな運動よりも読書好きな子供でした。四年生の時、同じクラスの読書好きで大人しく色白な恩地君と云う少年と親しくなりました。初めて恩地君の家に遊びに行った時、彼の祖父・・・恩地孝四郎さんが出て来られ、予め恩地君が話していたのでしょう“君は読書が好きなんだって？どんな本を読んでいるの？”と聞かれましたので、私はその頃読んでいた本について話をしました。すると恩地孝四郎さんは席を立ち、奥の部屋から一冊の本を持って来て“この本はとてもいい本だよ。家の子供たちもとても面白いと云っているよ”と云いながら私の手に差し出して下さいました。それは芥川龍之助の“杜氏春”でした。美しい絵も沢山ありました。家に持ち帰り夢中になって読みました。本当に面白かったです。読了後すぐ恩地君の家に本を返しに行きました。恩地孝四郎さんも出て来られて“この本面白かった？ どの様に面白かった？”と聞かれ、私なりの印象を話しました。話の終わりに恩地孝四郎さんは私の目線にしゃがみこんで“本は良いものを選んで読むのですよ”と真剣に話して下さいました。

家の近くでよく写生をしている青年がいて親しくなりました。ある時“僕、恩地孝四郎という絵描きさんを知っているよ”と云ったら、彼はすごく驚いて“その人は物凄く偉い絵描きさんだよ。私の家に来てごらん”と云って小さな私を自宅につれて行きました。そしてある美術雑誌を取り出して来て恩師孝四郎の特集の頁をみせて“こんなに偉い絵描きさんなんだよ”



恩地孝四郎氏

と説明して下さいました。

それから暫くして、どういう偶然か西田小学校での放課後、ある教室に入りました。丁度、恩地孝四郎さんが子供達、先生そして父兄の為に作品展を行う準備をしているところでした。

恩地孝四郎さんが梱包の中から一枚の絵を取り出し壁にかけようとしている時、私はいきなり“僕その絵を知っているよ！！雲は天才であると云う絵だよ”と云いました。

私は過日見た美術雑誌の頁が頭に残っていてそれを云っただけでしたが、廻りにいた人達、何よりも恩地孝四郎さんが驚き、喜んで下さいました。そして恩地孝四郎さんはその絵を手にながら“これは石川啄木の詩からイメージを得た作品なのです”ととても丁寧に私達に説明されました。

年が長じるに従って、日本美術界での彼の足跡を理解出来るようになり恩地孝四郎は偉大な芸術家であると思うようになりました。特に最近、幼い子供に“良い本読むんだよ”と真剣に語りかけた・・・そんなことが出来る恩地孝四郎は本当に素晴らしい偉大な芸術家と思っています。

私の西田小学校の思い出は文化芸術の馥郁(ふくいく)たる香りがします。

だから毎日そこを通過して学校に行きかえりす

この随筆は昭和 51 年(1976 年)の「暮らしの手帖」10 月号に掲載された。朝永博士のご長男朝永淳氏は西田 小の 13 期卒業生である。同氏と連絡がとれ、本随筆の転載の承諾を戴いた。同窓会シニアにとっては思 いだすことが多々あると思う。紙面の都合でごく一部を割愛させていただきました。ご了承ください。

西田町一丁目

朝永振一郎

(第 5 代 PTA 会長)



いま居る家に引っ越してくるまで、われわれの家は西田町一丁目というところにあった。しかし何年か前に、いくつかの町を合併したり、その境界を変えたりして新しい町の名にすることが流行し、西田町一丁目という名の町は、そのとき限りなくなってしまった。

この西田町は、町と言っても本当はむしろ村であった。何しろ、町の半分は田んぼであり、あと半分は、それをとりまく台地であるが、その上も大かたは畑地であった。そこには、麦畑や野菜畑が広がるなかに、こんもりとした屋敷林にかこまれて、藁ぶき屋根の農家がところどころにあった。また、畑の間には、畑地の一部をさいて建てられた住宅がぼつぼつとあり、後から移ってきたホワイトカラーの連中がそこに住んでいた。

町の一丁目は、台地の上にあった。そのまん中のあたりには小学校があって、西田という町の名は、西田小学校というその校名のなかに残っている。そしてこの学校をとりまく一區画には移住民たちの住宅が小さな集りを作っていて、われわれの居た見すばらしい古屋もそのなかの一つであった。

家の前の小みちは小学校の門に通じている。ただ鉄線のとげに引っかかった落し紙のなご

だから毎日そこを通過して学校に行き帰りする子どもたちの姿が見られた。この道は巾がせまくて車がほとんど通らないので、子供たちにとってそこはただの路ではなく、安心して遊べる道草天国なのであつた。

またこの路は、うっそうと繁った屋敷林と竹やぶの間を通過して、そこをぬけて学校の門近くまでくると、天気の良い日にはいつも富士山が見えた。だから大人たちにとっても、そこはとてもよい散歩みちであつた。

しかし、それは天気の良いときの話である。冬、霜ばしらが立ったり雪がふったりしたあと、あるいは入梅で雨つづきのころなどにはこの路がいつもどろどろのぬかるみになり、通る人はなんじゅうしたものである。

そういうとき、人は路の横の野菜畑をつつきりたくなる。だから、地主のおじさんが、畑のまわりに有刺鉄線をはりめぐらしたのは尤もなことだ。

けれどもこの防御策もあまり効きめがなくて、畑の中は、おのずから道をなす有様であつた。そこで業をにやしたおじさんは、ある日、鉄条網全体になまなましい下肥をぶっかけておくという手に出た。奇想天外なこの手はみごと功を奏し、畑に入る人はなくなったが、おそろしい臭害が、畑のまん前に住んでいるわれわれ一家を襲った。だがこの悪臭も、下肥が雨に洗われ風にふかれるうちにだんだんと薄れ、

りがいつまでも残っていて、この辺の人は、それを見るたびに、このおかしな事件を思い出したのであった。

このぬかるみは、学校に通う児童を持つ母親たちにとって頭痛のたねであった。路がぬかるむたびに、子どもたちは着物のあちこちに泥を跳ね、なにしろ戦後間もないころで、石鹼もじゅうぶん手に入らず、洗濯は容易なことではない。そこで母親たちは署名を集めて役所に陳情し、路に砂利を入れてもらうことになった。けれどもそれを路にひろげ平にならず作業は自分たちでやらねばならない。そこで御婦人たちはモンペ姿かきがいく勤務奉仕をした。

小学校は、校舎再建が一大課題であった。そのときPTA会長をおおせつけられ、学校の先生がたや父兄たちとつれ立って有力者の家を陳情にまわった。そんなことをして、やっと新しい校舎ができたときには、学校を色とりどりのモールや造花でかざり、国旗と校旗をたて、子どもたちといっしょに校歌を歌って祝った。

学校の設備はまずいいものであったが、環境はこの上なく好適であった。春、畑ではヒバリが鳴き、夏は屋敷林のあたりでセミ取りができた。秋は秋で、あたりにはドングリがいっぱい落ちていたし、冬、雪のときには、台地から下におりる坂みちで雪すべりができた。田んぼのところには川が一本うねうねと流れていて、その堤やあぜみちは四季おりおりに野の花で色どられ、田の中にはエビガニやタニシがたくさんにいた。また台地の東がわには、急な崖が下の平地に落ちこんでいるところがあって、崖の上からは田んぼと、そこを流れる川が見おろされ、満月のときには、稲田の向こうから盆のようにまん丸い月の上るのが見られた。

台地からは、雑木の中を行く窪みちを通して崖の下におりることができる。そうすると、崖の下には暗くしげった杉の林があり、子どもたちはそこを雨宮の森とよんでいた。雑木林もこの森も彼らの恰好な遊び場所であって、そこにはカブト虫やいろんな虫が住んでいた。そして夏の朝、暗いうち起き出てそこへ行くと、樹液にむらがる獲物を捕えることができた。そのとき踏みしめる草の朝つゆはさわやかに足を冷やしてくれたものだ。雨宮の森という何か由ありげな名の起こりを知りたかったが、子どもたちは、ただ口から口へとその名を伝えていたのであった。

そのころわれわれの家のあたりでは、吸い込みという原始的な方法で下水の処理をしていた。しかし風呂水の処分はこの方式の能力を越えていたので、どの家でも入浴には台地をおりて銭湯に出かけて行った。そうゆうわけで、近所の子どもと遊んでいる息子にむかって、おい風呂に行こう、と呼びかけると、その子どもたちも、ぼくも行こうおじさん、と言い、みんな家に手拭や洗面器をとりに行き、そうしてぞろぞろと小父さんについてくる。彼らにとって銭湯は、今の子どもたちのプールと同様、楽しい遊び場の一つなのであった。だから、洗え洗え、とうるさく言わない小父さんは、おそろく理想的な引率者だったのだろう。

田んぼを流れる川が雨宮の森近くに来るあたりで、川向うの台地が東からなだらかに延びている。そしてそこには小さな神社があり、九月にはお祭りがある。雨宮の森をぬけて土橋を渡り、細みちを行くと、境内には何軒か露店が出ている。神楽の奉納などもあって、にこにこしたエビス様の面をつけた老人が、ひなびた舞を見せ、参拝の大人や子どもたちがそれを見物している。露店では、安物の玩具や、おでん、鉄板焼き、などの食べものが売られている。

うちの子もたちも、母親にせびって、食べものはいけま せんよ、という条件で金をもらって、くだらない玩具を買ってくる。大人になってから息子は、あのときおでんを買って食べたよ、とてもうまかったよ、と感慨無量の様子で白状した。

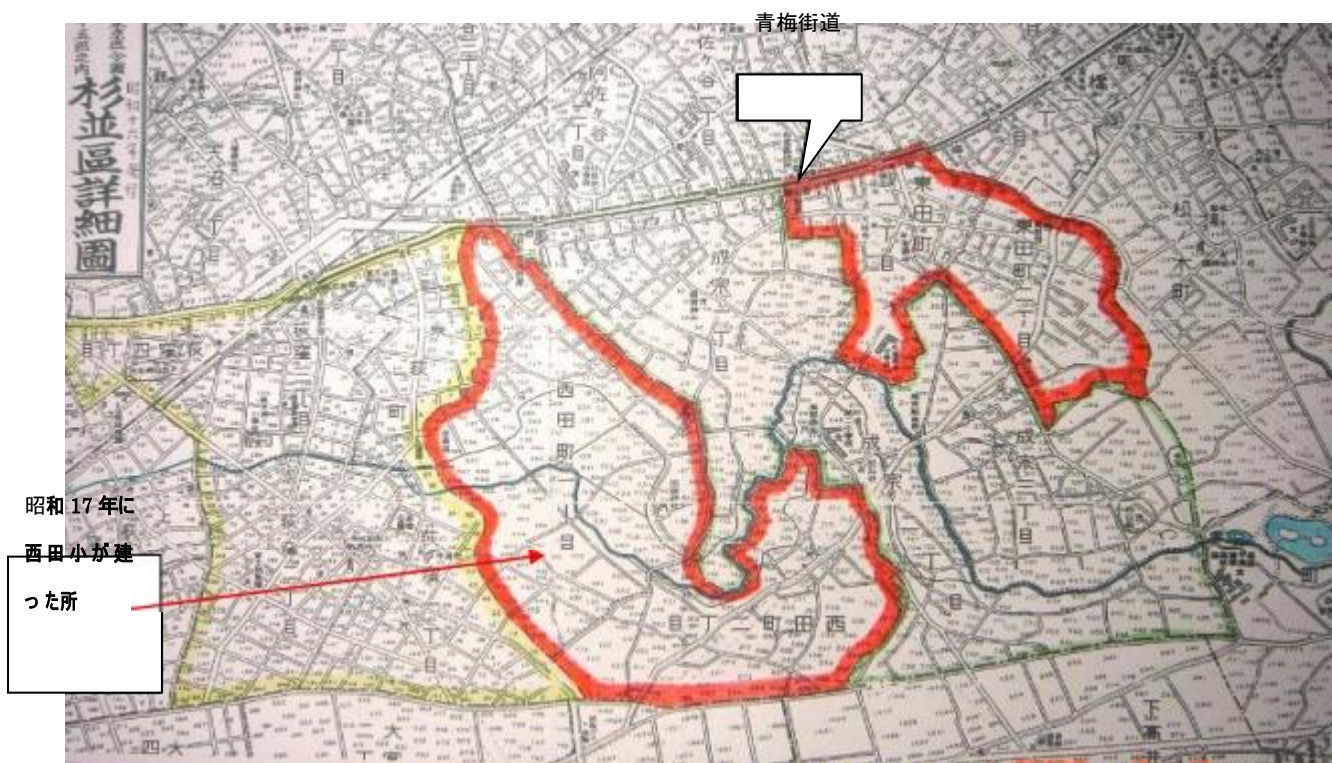
小学校の門のところから西に向かってだらだらと畑 みを下って行くと、バス通りにぶつかる。そこにはいろいろな店がならんでいて、一すじの商店街を作っている。九月にはこの街でも祭礼がある。その日は通りの あちこちに天幕が張られ、そのそれぞれから太鼓の音 が競い合うようにひびく。そして、たくさんの露店が出て 賑やかである。ぶらぶらと見学に行くと、少しきこしめした紳士が、PTAの会長さん一ぱいいかが、と言って茶 わん酒を馳走してくれた。もちろん、よろこんでちょうだいした。

地域の歴史シリーズ 「西田町一丁目」

西田町はこんな田舎であったのに、二十数年たったいま、名前だけでなく、町の様子もまるで変わり、すっかり市街地になってしまった。

先日、古い記憶をたよりにそのあたりへ出かけ、雨宮の森があったと思われるところに行ってみた。見ると、雨宮の森の後ろにあった崖も、台地を下りてくる窪みちも、地形だけは昔のままに残っていた。だが路に梢の影を落としていた雑木林や崖下をしっとり覆っていた杉の叢達(むらだち)は今あとかたもなく、あたりはただ、家々にかこまれた平凡な町並になっていた。昔のような西田町は、やっぱり、そこに住んでいた人間の心の中にしか、もう存在しないのだ。

朝永振一郎博士の随筆「西田町一丁目」を載せるに際し、何人かの方とお話しをする機会があった。西田町(にしたまち)の地名に付いて“田んぼの西側にあったから”と考えておられる方が何人か居られたので、この機会にこの町の名前のいきさつについて考えることにした。結論は田んぼの西だからではないのである。先ず第一の資料、下の昭和16年の杉並区の地図を見ていただこう。赤印左の西田町一丁目の東の成宗一丁目の更に東に東田町(赤印右)があったことを先ず確認して欲しい。



第 2 の資料は明治 13 年(1880 年)測量の古い地図から下荻窪村、田端村、成宗村の部分を取り出したものである。(中央線と荻窪駅を判り易くするために加えてあるが勿論この当時には存在しない)

明治 13 年測量地図を基に作図



62 年後に西田小が建つ

前頁の昭和 16 年の地図と似通っているのに気付く筈である。左の赤印が田端村、右の赤印が田端村飛び地である。下荻窪村、田端村、成宗村は非常に古く、江戸時代初期からこの状態で続い てきた。田端村の飛び地は江戸時代のある時期に田畑開墾奨励策から、村を離れた地域であっても、開墾した村の所属地として認めたことによるとされる。色々な地名変更を経て、明治 22 年頃の田端村は東京府東多摩郡田端村となっていた。

明治 29 年、東多摩郡と南豊島郡が合併し、豊多摩郡ができ田端村は東京府豊多摩郡田端村に。大正 13 年には田端村は東京府豊多摩郡杉並町に吸収され、同様下荻窪村は豊多摩郡井荻町に吸収された。杉並地域は杉並町、井荻町、和田堀町、高井戸町の 4 つの町に集約された。昭和 7 年、東京市杉並区が誕生。田端地区は東京市杉並区西田町となった。この時、東の飛び地の田端村は東田町となり、東と西の関係が曖昧となったのである。

田んぼの東とか西とかとは関係ない話である事がお判り頂けたであろうか。

荻窪一丁目となるともっとややこしい。荻窪と云う地名が江戸時代からあり、今や西田町や東荻町の広範なエリアに更に広大な旧荻窪町を加えて、1 丁目から 5 丁目に再分割し、町の境界線まで いじくってしまったので、新旧をフォローするのは不可能とも云える。地名をいじくるのはまさに考 えものだ。昭和 18 年になって東京都が出来、昭和 39 年の住居表示制度実施があり、西田町一丁目はようやく東京都杉並区荻窪となったが、荻窪 1～4 丁目に細分化されてしまった。

卒業式の記録

今年も同窓会を代表して招待を受け、母校の卒業式に参加した。第 69 期、122 名の卒業生が巣立っていった。今回で、創立以来の卒業生は 11,008 名と記録されている。延々と繋がっていく西田小学校の歴史を感じる一瞬である。学校初期の頃の卒業式の記念写真を拾ってみた。

長い西田小の歴史の中で、母校で卒業式を挙げられなかったのは3期生だけであった。



左の写真は3期生女子組の卒業記念写真である。場所は桃井第二のジャングルジム。多くが集団疎開帰りであった。西田小の校舎が前年5月に全焼して、桃二の校舎を借りていた。

中段左に担任の河野先生が写って居られる。先生は5代目の校長になられた。

西田小の歴史の一こまを残す貴重な写真である。この年の7月、この校舎の落成式が行われた。写真の中には戦闘帽をかぶっている男子が多く写っている。こんな時代であった。後列に岡田忠七、濱真喜男両先生が写っておられる。



師父の如く、慈父の如く

河西宏和（第 10 期卒業生）

昭和 25 年 4 月、疎開先の山梨から東京杉並区の西田小学校に転校した私は高等師範を卒業して間もない色浅黒いスポーツマンタイプの青年教師に迎えられた。4 年生から 6 年生迄の三年間を連続して担任をして下さった岸上先生との出会いであった。

疎開先から戻って来た大勢の生徒を収容し切れなかった校舎は、校庭の一角に繁っていた青桐の木々の下に、木製の大テーブルと長椅子を何列か備え付けた仮設の野外教室を設置し、そこで生徒たちは交代で授業を受けた。音楽と家庭科以外の全教科を岸上先生が一人で受け持たれたから四六時中一緒に居て下さった様なものである。われわれはこれを青桐教室と呼んだ。昼には給食のコッペパンを共に齧り、脱脂ミルクを啜って下さった。圧巻は放課後のスポーツであった。毎日の様に男子はサッカー、女子はドッチボールかキックボールを日没近く迄一緒に泥まみれになって教えて下さった。将に我々と先生とのスキんシップの塊がそこにあった。

サッカー全盛の世相の今日、半世紀以上前に都内でもプレーをする小学校はほとんど見当たらない時代にいち早くこれを教えて下さった岸上先生の先見性を振り返る度に偉大さを増す。

今日、頻発する家庭内暴力、校内暴力の責任の所在を巡り小中学校の教育の在り方がしばしば世論を賑わしている。私はこの悲しむべき現象は決定的に生徒と教諭のスキんシップの欠如がもたらす疎外感に起因するものと思う。

定められたカリキュラムから一歩でも進んで児童を指導し、又放課後まで一緒に飛んだり跳ねたりして一体となった児童教育に情熱

を燃やす教諭が稀有となった。

保護者も得てして何か子供に問題が生ずれば、自分の子供への躾や指導の不徹底さを棚に上げて

学校の教育の欠陥としてこれを転嫁する風潮すらある。情けない限りである。

最近のこのような社会現象への警鐘を聞くにつけ、我々と毎日日の暮れるまでサッカーボールを蹴り、一体となって少年時代のばら色の日々を築いて下さったあの若き日の岸上先生のお姿を漫（そぞ）ろ思い出すのである。多感な少年時代にある時は大山が目



高くそびえ立つ様に毅然とした、そして威厳に満ちた態度で人の道理を授けて下さり、又ある時は慈愛に満ちた父のごときスキんシップで我々を導いて下さった岸上先生は、将に私にとって永遠の偉大なる師である。



岸上先生のアルバム

これらの写真は坂本正夫氏(18期卒業生)から提供された。岸上先生のクラスは卒業期を通して全校同窓会に協力をして頂いている。

第7期生(昭和25年3月卒業)
岸上先生の最初の卒業生である。まだ、裕福さが感じられない時代である。児童の足元にそれが表れている。



第12期生(昭和30年3月卒業)
先生は10期も担任された。
12期ともなると裕福さが感じられるようになる。

第16期(昭和34年3月卒業)



16期



昭和35年夏休み成田地区少年野球大会で優勝。

「優勝旗を先頭に荻窪団地から学校まで行進。祝勝会は学校の教室でカツどんを食べた。ユニフォームはグレーの縦縞。ある野球部員の父親が寄付してくれた。」との説明書きがついていた。

第18期(昭和36年3月卒業)

西田小学校に10年以上勤務された先生はそう多くない。特に、創立時には変化が多かったことが、背景の校舎の変化、児童の裕福さの変化などに表れている。



2011 年の世話人会を 2011 年 7 月 24 日に西田小学校内の西田ゆうゆうハウスで行った。
今年には新世話人の参加もあって、活発な討議が行われた。席上皆さんの賛同を得て、議論の

続きを兼ねた懇親会をやることになり、10 月 22 日に実現した。

皆さんのご希望で、会費制で、今や荻窪名物となった「西郊」(昔の西郊ロジング)での会となった。殆どの参加者が西郊の外観は知っていても、中は初めてということで、当主の平間さん(2011 年より当同窓会の理事に就任)の気配りも頂いて、食も話も進んだ。下の写真は当日の参加者

である。なお西澤さん(18 期)は記念写真撮影前に所用で帰られた。

前列左から

田村(理事:2 期)、大石(23 期)、土屋(会長:3 期)、河西(10 期)、和田(2 期)、島田(18 期)

中段左から⁵

中田(理事:13 期)、宇田川(7 期)、中村(副会長:7 期)、坂本(監事:18 期)、渋谷(副会長 8 期)、田辺(理事:17 期)、小島(17 期)

後列左から

吉田(12 期)、安藤(19 期)、宇田川(理事:19 期)、濱井(11 期)、柏木(理事:9 期)、萩原(20 期)、北岡(3 期)、藤田(11 期)

の皆さん。

(敬称略。卒業期のみ記載の方は世話人)



当日の話題は、次の時代の同窓会の骨組み作りに集まり、前向きのご意見も多く出て、更にこの話を続け て行く事になった。



会長挨拶: 経過報告、今後の提案など



編集後記

今回の編集は母校創立 70 周年記念号と云うことで、思い切って“開校時の昔に時間軸を戻して”みました。偶然にも、今年は、あの荻窪団地の建物が耐用年月を終えて完全撤去され、一旦は広大な水田跡に戻された後、新しいスタイルに変えられようとしている年でもあります。



左に見える白い建物は旧団地西側半分に新装なった新団地です。土の部分はこれから工事が始まる東側半分の用地です。昔の西田たんぼは現在の土の部分の2倍の広さがあったことになります。

中央右の遠方に見えるのが荻窪駅近くのオフィスビルです。

2011 年 7 月 11 日撮影

この 70 年で、学校も、学校をとりまく社会の様子も大きく変わりました。

同窓会も創立 20 周年、ここを一区切りにして、母校の応援団として、児童たちが強い日本人に育ってゆくのを見守って行けたらと願っております。

本年末までに、同窓会の今後の運営についてご相談すべく、アンケート用紙ををお送りする予定にしております。 まだ少し先のことではありますが、皆さまのご協力をお願い申し上げます。

土屋忠夫(会長) メール・アドレス : tadao-t@taupe.plala.or.jp